

はたらっく・ざまの報告

「はたらっく・しゅうかく祭」報告

10/31（月）ハロウィンの日。「はたらっく・ざま」では「はたらっく・しゅうかく祭」と題しハロウィン企画を実施しました。ハロウィンは初の試み。企画の段階から、利用者が主体的に関われるよう、利用者、スタッフによる実行委員会を立ち上げ、リーダーもメンバーから選出して、タイトル・内容等を3回のミーティングで話し合ながら決めていきました。タイトルは実行委員から出された3案を、来所した利用者にアンケート式で投票してもらい「はたらっく・しゅうかく祭」に決まりました。ホラー映画が大好きなメンバーが熱のこもったプレゼンをして「ホラー映画コーナー」。サポーター作製の昔遊びゲームが面白いと「ゲームコーナー」。手作りのクッキーと飲み物でほっと一息できる「カフェコーナー」と3つのブースに分けて行うことになりました。飾りの「ハロウィンガーランド」を「はたらっく」「居場所ここから」に来所した利用者によって作ってもらい、仮面やごみ袋のマントなども作製しました。前週の金曜日、実行委員・利用者8名が参加して3ブースの飾りつけを行い、当日を迎える準備をしました。

「映画コーナー」

スタートと同時に短編ホラー映画の上映が始まりました。全身“貞子”に変装したメンバーが、各ブースに現れると悲鳴の音が・・・たまたまビルの中を歩いていた子供が泣き出してしまうというパニングもありました。“貞子”に扮した彼は、この日の為に「カツラと白の衣装」の“貞子グッズ”を購入という熱のいれようでした。20分の短編5作品も彼がユーチューブからチョイスしたもので、どの作品も人が絶えることなく盛況でした。

「ゲームコーナー」

スタート時から人が集中。まずは、景品付きの「空気ロケット」「割りばし鉄砲」「ダーツ」にチャレンジ。スタッフが事前に試した時は、中々命中しなかったもので、そのつもりで景品を用意していたら、“なんと



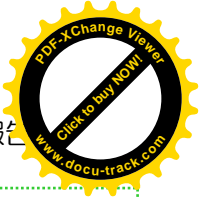
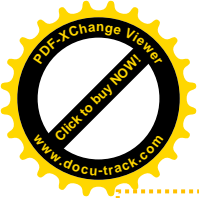
うことでしょう！”当てるは～当てるは～景品が足りず急遽補充する事となりました。やはり若者は違うことを改めて実感した次第です。実行委員3名・サポーター2名が担当。丁寧にゲームの説明をしてくれたおかげで、なかなか人の輪に入っていけない利用者も安心してゲームを楽しめました。

「カフェコーナー」

照明を落とし、各テーブルに小さなランプとメニュー表。お揃いのエプロンドレスとカチューシャといういで立ちで担当実行委員とスタッフがお出迎え。スタート当初は映画やゲームコーナーに集まっていたのでしばらく閑古鳥状態でしたが、徐々に来場者も増え、でも混雑することなく「ほっと一息」の空間を提供することができました。ドリンクメニューは全部で12種類。種類の多さに驚いていた方もいました。ハロウィン仕様の袋に入った手作りクッキーは「可愛い」「美味しい」と好評でした。

景品は、さがみ生活クラブ組合員（日用雑貨）と座間市社会福祉協議会（食品）の寄付で賄いました。準備から片付けまで利用者・サポーター・スタッフが一丸となって実施した経験は、これからの大きな力になると思われま

（あんざいよしこ）



「みんなの居場所ここから」家族セミナー報告

家族セミナーの実施で期待されること

「みんなの居場所ここから」は、ひきこもり状態の方とともに過ごしているご家族をどう支えるかどう支援するかが大切と考え、家族相談と家族セミナーを実施しています。

昨年度に実施した家族セミナーがきっかけとなって、継続的な来所での相談、電話、メールでのやりとりを通じて、家族の方との関係を作っていくことにつながりました。

また、家族の方が少しでも心の余裕ができれば、家族の雰囲気が変わり、当事者への対応等に変化が期待できます。当事者とつながるには、時間がかかります。まずは「みんなの居場所ここから」が家族の信頼を得ること、家族がほっとできることを目指しています。

今年度は、家族セミナーを2回開催しました。

1回目は9月30日に、ひきこもりを体験したことがある若者2名に「みんなの居場所ここから」に来ていただき、「引きこもったころの気持ち」「家族に言われていやだったこと」「家族にしてほしかったこと」「動ききっかけになったこと」「居場所に求めること」などをお話しいただきました。

おふたりから「恨んでいるわけではないのに、うまく会話できない」「嫌いではないのに、兄弟とうまく話せない」「電気代や水道代がかかっていることを悪いと思っているのに、気持ちを伝えられない」「学校に行かせようとするが、嫌なことはいやと言いつ返せないもどかしさがある」「気を遣われていると感じるのは苦痛」など率直な気持ちを話していただきました。ひきこもっているときのいらだち、嫌悪、罪悪感、気遣いなど家族に対する複雑な思いを知りました。ティータイムでは、家族の方からの質問にも答えていただき、和やかな雰囲気のなか、実施できました。終了後には家族同士が話したりする様子が見られました。

家族、私たちスタッフ、県や市の担当者も学ぶことが多かったです。

家族の感想からも「ありのままの気持ちを話してもらい感謝」「本人はいろいろ考えているのだから、本人が決めて行動するのがいい」「自分があせってはいけない」と気づきがあったようです。

おふたりが利用している居場所は、いざという時支えになってくれると思えることで、心の支えになっているとのこと。「みんなの居場所ここから」が利用者の方の心の支えになるよう接していきたいと改めて思います。

2回目は11月23日に『「ひきこもりを生きる」って何?』と題して、白梅学園大学教授の長谷川俊雄（はせがわとしお）氏を講師に招き、お話を伺いました。長谷川先生は、横浜市役所の社会福祉職として、寿生活館、福祉事務所、保健所でソーシャルワーカーとして勤務。その後、精神科のクリニックでソーシャルワーカーとして勤務。2002年からは大学教員として研究・教育とソーシャルワーカー養成に取り組まれています。セミナー参加者は、家族、当事者、関係者を含め、51人でした。

先生はひきこもりの方は、「社会に出ることに慎重な態度から生まれる苦悩を表現している人たち、自死しないで生き延びることを選択した人たち」と表現されました。そして、「ひきこもり⇒外出・就労」というわかりやすい物語は、本人を傷つける、絶望させることもある。また、許可なく導くこと、過剰に心配することの暴力性になかなか気づけないと話されました。家族、支援者には、重い言葉でした。

家族は、自分の不安、焦りを本人を変えることで解消するのではなく、自分自身の辛い気持ちを自分や他者に向けて解消しましょうという話があり、家族にとって「みんなの居場所ここから」がそれを受け止める場所のひとつになれるよう、家族ケアの視点を持ちたいと思う講演でした。

(平山 喜代美)

